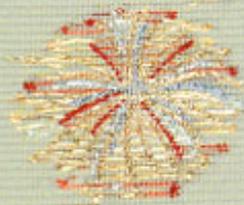


京鹿子

昭和二十三年九月二日第三種郵便物認可
平成二十三年七月一日発行
第百一〇四三年(第百一〇四一年)第一回一日発行



7月号



夏季吟旅特集号

豊 田 都 峰

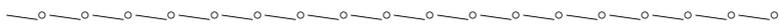
灌 響 集 その二十三

虻ひとつ花圃のまひるをかなでゐる
虻去りてたちまち園にくるひぐれ
日永とてなかばうつつの椅子あたり
丘占めてひぐれの花のちりそむる
花散れば恩讐はみな超ゆるもの
敗走のここにはじまる城址落花





葉 桜の道ひとすぢに神座す
桜しべ敷き京終の碑のひとつ
母の日や名もなき丘のみちがすき
柿若葉大和古道は山に添ふ
振花の底より昇りきしかたち
山の日をひとつにあつめ滴れり
したたりてたつきのかてと村よぎる
山よりの流れのはての花あやめ



宮落葉 丸山佳子

盆が来る思へば御恩の方ばかり
冬將軍に今日は逢へさう青信号
宮落葉清めたまへと私に
常よりもはづむ瀬音や昭和の日
君の名は田植ゑみてゐる私に



秀華採集

春宵一刻万の字負ひて万年筆

木戸 渥子

春宵一刻、かけがえのない一時に沸く思いも千金。それを書き留めるには、万年も先まで書き留めてくれるものにしくものはない。遊び心を操れば俳句もまた楽しいというもの。

寄せきれぬまま引く波や春愁ひ

田畑 耕之介

春の闇もろもろの鍵ポケットに

上野 民子

前句は正体のつかめないようなものをひとつの具体として示しているが簡単な
がら響えがよい。後句の「もろもろ」は形のない鍵を多く含んでいると解釈した
時「春の闇」が微妙に響き出す。

鈴鹿 仁

奈良吟行

あきしのの風のねぎらひ実梅熟る

夏めくや京立つ辺りたちつてと

目に青葉りんりんとして南都の史

流れ雲追ふ鹿の子のまなござし

早苗月大和は神の語り種

近 詠

和田 照海

糸遊

たらちめの忌や蚕豆の花ざかり

母の忌やいつも沖より春の波

母の忌や本堂冷えといふ春昼

霜くすべ母郷の系譜あいまいに

糸遊にひとりまぎれて出棺す

神麓集



東北関東大地震 北村香朗
震 災 地 白 皚 々 の 朝 迎 ふ
彼岸会や巨大地震の爪のあと
津波又被害は万と伸びてゆく
幾千の爪あとのある大地震
有史史来の地震に没する花便り

黄砂万丈 藤岡紫水

黄砂万丈もの影深き一日なり
鳥帰る天変地異にかかわらず
掌に包む志野のぬくみや夕ざくら
春愁や黒猫を抱く夢二の絵
八十八夜ねばり薄れる貼り薬

松田都青

乗つてみたい溺れてみたい花筏
べらぼうの棒が倒れる春の闇
賑やかな時間の外で花を待つ
春泥をざくざく踏んで敗け戦さ
見も知らぬ明日へ明日へと花が散る

服部郁史
咲く花のすべてが供華よ祈るのみ
両手垂れ瓦礫に立つ人鳥曇
花の無き瓦礫の町を横切る鳥
灯も炎も無き春闇の人の呼吸
失語後は白雲となる春野かな

芍薬 丹生をだまき

くれなゐの芽なりし芍薬咲けば白
今朝の供華亡夫植糸置きし芍薬を
惜春や禿びたる4Bまた削り
無人島ぽつねんと在り青葉潮
一人静にめぐりあひたり吉野道

山田をがたま

楠若葉いま雄樹雌樹の別著き
朝毎に鯉のぼり仰ぎ元氣受く
新茶先づ亡母に供へて語りかく
リハビリの満身包む若葉風
姉の憶ひ胸にしはりと春の雨

神麓集



羽化の蟬 竹貫 示虹
 蟬の羽化もうあともどりは出来ぬ
 郭公の二の聲遠し畑仕事
 沙羅咲いて落つ一日のみじかさよ
 をさなごのまんまるまなこ二重虹
 紙魚として生く酔狂も許されよ

桐の花 柴田 朱美

桐咲いて一族といふ冥きもの
 身に叶う明るさに居り桐の花
 切妻の懐深く桐の花
 何時来ても留守の交番桐咲けり
 県境は橋のまん中桐の花

指の黙 伊藤 希眸

マラソンの先頭の黙春寒し
 厚岸ざくら一花ほころぶ指の黙
 地震激し黙・黙・黙にさくら散る
 春蚊打つ講堂に黙通しけり
 黙示の声紅ばらの刺消えてゐる

仲春 丸井 巴水
 発つものはたち仲春の沼かろし
 柔らかき摘み草の嵩持ち帰る
 稲荷山直射の春陽落ちかかる
 どこまでも影いとほしき春なかば
 薦若葉いまだランプの喫茶店

遍路 松本 鷹根

言ふすべなし地震なの瓦礫なに雪まで積み
 早立ちの遍路うち振る佗びの鈴
 皆笑顔 遍路接待してされて
 四国の土つけしまま置く 遍路杖
 小町もかく眺めしならむ花の雨

船越 美喜

入江にはマストの並ぶ薄暑かな
 滴りの音も昏れゆく岩の上
 柔らかな陽ざしことさら柿若葉
 子子を知らぬ子の居て川ほとり
 夕薄暑歩いて帰ることとして

夏季吟旅特別吟

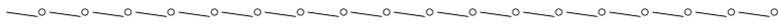
豊田都峰

寧楽暮春

花藤や寧楽の天女の織りし頒布
万緑の宙みすがたに仏たつ
日の暈を後背として春逝く寺
げんげ野のはて天平の寺麓
藤咲けば天女の裳裾風が染む
天平の遅日の柱影かさぬ



青き踏む二条大路の西はづれ
揚ひばり朱雀門前町あたり
風若葉木簡にきくたつきごと
白鳳の祈り水煙に春陽発つ
金堂のまろき柱に触る暮春
阿修羅祈る春日にまがふ散華あび
天燈鬼ささぐは遠きおぼろの灯
わぎもこのきぬかけ柳まづ散りそむ





京鹿子集

豊田都峰選

春宵一刻万の字負ひて万年筆

げんげ田や日出づる国のわらべ唄

王道は読み書きそろばん抱卵期

佐保姫や使ひこなしで男仮名

寄せきれぬまま引く波や春愁ひ

家中の時計ちぐはぐ春愁ひ

秀眉ふと愁眉にかはる雛納め

卑弥呼てふ謎なぞ遊び草おぼろ

春の闇もろもろの鍵ポケツトに

糸遊やガラスの瓶に閉ちこめる

京都 木戸 渥子

大津 田畑耕之介

習志野 上野 民子

幽かなる焰を残しつ夕桜

花吹雪母を攫ふて逝きにけり

フィナーレはムソルグスキー春の演

あの桜今日が見ごろと子のメール

進学の娘らのメールなほ口語調

春陽満つ研究室で誕生会

被災地のひと枝びんに初桜

校庭の大樹桜に人笑みて

信じる事心洗はるイースター

車中はうつらうつらの春ゆかす

アリソナ 伊吹 之博

渋川 東 秋茄子